

## 7 バセドウ病初診患者の不安に関する研究

宗田 聡・鈴木 達郎・石澤 正博

新潟市民病院内分泌・代謝内科

【目的】バセドウ病未治療患者の約40%に不安、うつ状態を認める。感情安定作用が甲状腺機能改善に有効であるとされ、当院にて検討を行った。

【方法】未治療のバセドウ病患者の治療はMMI 30 mg/日で開始し、fT4を指標として増減を行った。不安検査はSTAI (state-trait anxiety inventory) を用いて治療前、後4と8週目に評価した。観察群A群とSTAIでの不安評価が高い患者の中から、パロキセチン20 mg内服に同意したB群に分けて検討した。

【結果】14名(A群11名、B群3名)が参加。初診時平均fT4はA群5.9 ng/dl、B群5.7 ng/dl。特性不安はA群46.5、B群60.7、状態不安はA群45、B群59.3であった。8週目平均fT4はA群1.98 ng/ml、B群1.3 ng/dl。特定不安と状態不安は両群ともに改善を認めた。4週目でfT4が正常化した割合はA群37.5%、B群100%で、8週目ではA群55.6%であった。

【考察】薬物を用いた感情安定効果は、維持療法までの時間が短く、甲状腺機能の安定化に貢献した。不安状態の評価と介入が有用であると考えた。

## 8 TSAb, TSBAbの変動を繰り返す難治性バセドウ病に対しアイソトープ治療が有効であった1例

片桐 尚・五十嵐智雄・涌井 一郎

柏崎総合医療センター内科

症例は49歳、女性。バセドウ病寛解には到らず、MMI少量で経過観察していたが、甲状腺自己抗体は高値が持続。2007年夏、ストレス(御主人の病気、地震)が重なり、精神的に不安定になり、体重減少、甲状腺腫大を認めた。TRabの急激な増加と、エコーで著明な甲状腺腫大と燃え盛る

ような血流増加を認め、TSBabの出現(TSAbと共存)を認めた。以後、短期間にTSAb, TSBab抗体価の変動を繰り返し、甲状腺ホルモンもめまぐるしく変動、コントロールに苦慮した。以上から難治性バセドウ病と考え、アイソトープ治療を選択。2009年12月、外来で13.5 mCi投与した。その後は甲状腺腫の縮小を認め、ホルモンは安定化、患者さんのコンプライアンスの向上をもたらした。

本症のように甲状腺腫が大きく、TRab高値(TSAb, TSBab共存)の難治性バセドウ病患者に対しては積極的にアイソトープ治療を検討すべきと考えられた。

## II. 特別講演

### 内分泌と神経の連関から考える代謝調節の新たな理解

宮崎大学医学部内科学講座

神経呼吸内分泌代謝学分野 教授

中里 雅光